

河内国府遺跡の意義と遺物

関西大学文学部 米田文孝

今回の出開帳開催に当たり、なにわ・大阪文化遺産学研究センター長の高橋隆博先生から、「国府遺跡の意義と遺物というタイトルで、50分間に纏め平易に解説するように」という課題を与えられました。

ハイと申し上げたものの、旧石器時代から連綿と継続している、複合遺跡である国府遺跡について、多岐に及ぶ難しい内容を易しくお話しすると

いうこと、限られた時間内でこれはかなり難しい課題です。

しかし、遍く知られているように、現在の関西大学博物館の収蔵品の中心を占めるのは、国府遺跡の発掘調査を手がけられた、当時の大阪毎日新聞社主であった本山彦一氏が精魂傾け収集された、いわゆる本山考古資料です。末永雅雄先生が創設され50有余年の星霜を重ねた関西大学文学部考古学研究室のロゴマークが国府遺跡出土の珧状耳飾であること、さらに、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの事業推進で献身的にご協力

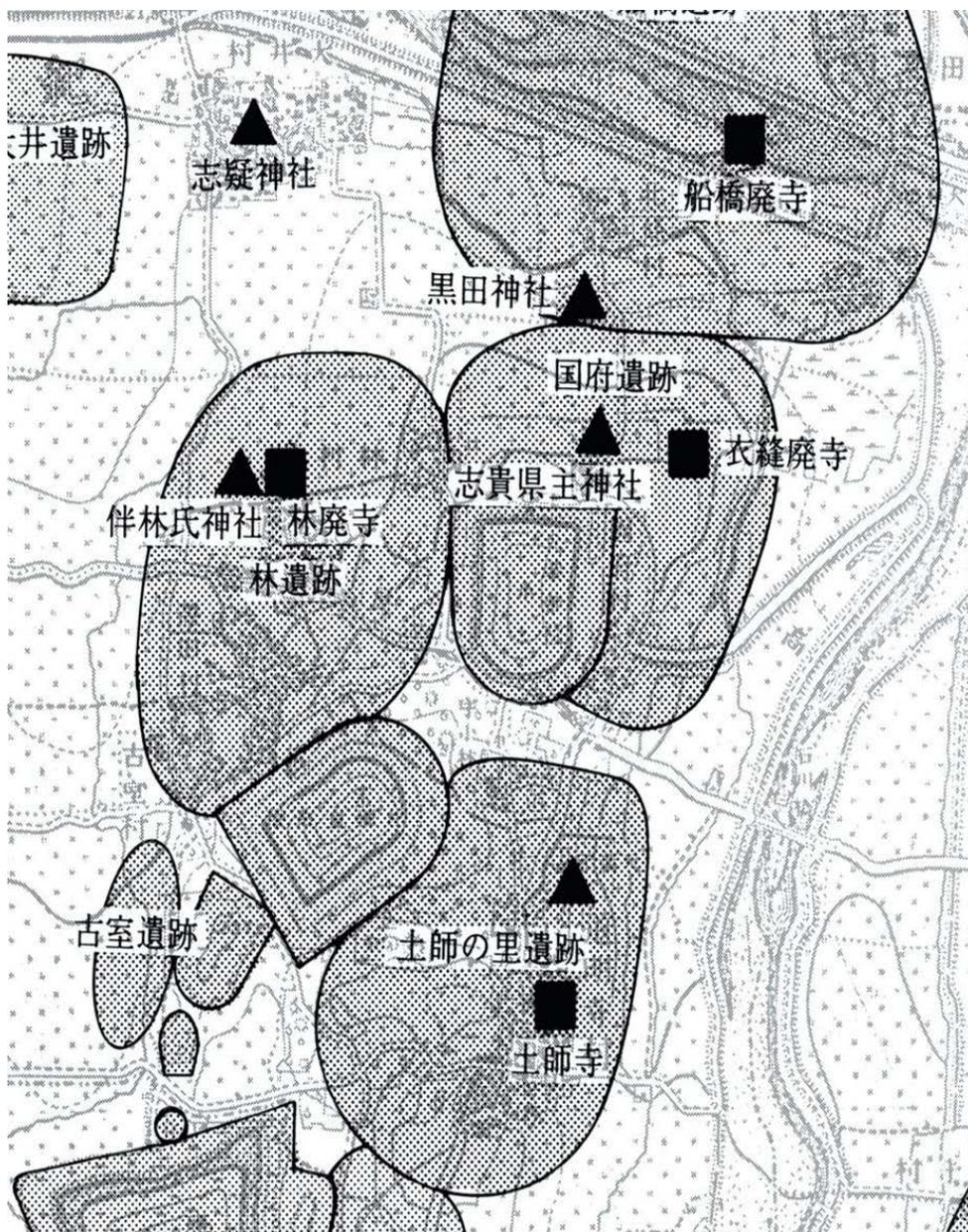


図1：国府遺跡周辺遺跡分布図（藤井寺市教育委員会 1996）

賜っている道明寺天満宮さんにも、後でお話しさせていただき経緯により、当時出土した玦状耳飾が保管されているというご縁等々、ここで少しは足下のことも勉強しておきなさいというセンター長の親心と、早速あれこれと紐解きはじめました。

しかし、学生時代から変わらない付け焼き刃流では適うはずもなく、結局は国府遺跡といえば玦状耳飾ともいわれる、縄文時代前期を中心とした特異な装身具とその評価をめぐる話題を中心に、先学の調査研究成果を活用しながら要点を解説させていただくことになりました。

1. 国府遺跡の現状と調査の沿革

I 国府遺跡の現状と発掘調査

国府遺跡は明治20年代(1892年、明治25年)に、後に地理学界の重鎮となられる、当時三高生の山崎直方氏によりその存在が知られるようになり、第一世界大戦中の大正6(1917)年から、京都大学などにより発掘調査が開始され、10回に及びました(註1)。第二次大戦後は、大阪市立大学の研究グループや大阪府教育委員会、藤井寺市教育委員会などにより、断続的に発掘調査が実施されています。(註2) その成果は多岐に及びま



図2：国府遺跡と道明寺天満宮

すが、本日は縄文時代前期を中心とした玦状耳飾に焦点を絞って解説させていただきます。

II 国府遺跡周辺の遺跡

最初の図（図1）は、国府遺跡を中心とした遺跡の分布図です。これらから一目瞭然、地元の皆さんが日頃、目にされている視覚的に明らかな古墳はもとより、地下に包蔵された遺跡がないのは、石川・大和川の流路や氾濫原だけであることが判ります。なお、船橋遺跡の中心部を大和川が東西に横断しているのは、元禄17（1704）年に開始された付け替え工事の結果です。

また、遺跡の表示がない空白部分も、現在は確認されていないということだけで、未知の遺跡が地中に眠っている可能性があります。こうしてみると、藤井寺市域は遺跡が密集している、まさに文化財の宝庫であることが判ります。

この図（図2）は、国府遺跡を中心とした行政区画図で、本日の話題に関する地点を示したものです。

III 国府遺跡の現状（写真1～3）

国府遺跡は藤井寺市総社の周辺に存在しています。現在、国府遺跡の中心部は国の史跡に指定されており、国や大阪府、藤井寺市の担当行政で、遺跡の保存措置や整備が講じられています。ただし、藤井寺市域にはわが国を代表する大型古墳群のひとつである古市古墳群をかかえていることや、先ほど申しましたように、地下に包蔵されている遺跡は視覚的に判りづらいことなどが重なり、国府遺跡については一般的に関心度が低いかもしれません。



写真1：史跡国府遺跡説明版

さて、発掘調査が開始された大正時代には、遺跡一帯は果樹園であり、民家が散在していました。このような景観は昭和30年代まで基本的に変わりませんでした。このため、遺跡保存の観点から、地域住民の方々の協力を得て、昭和49（1974）年に中心部が国指定史跡になり、昭和52年の追加指定以降も、行政機関の手で順次に指定地の公有地化が進められています。



写真2：国府遺跡の現状



写真3：国府遺跡の碑

IV 志紀県主神社と衣縫廃寺（写真4・5）

地元の方は当然ご存じと思いますが、国府遺跡のある場所に志紀（貴）^{あがたぬし}県主神社が鎮座しています。この神社は、後に述べるように大王家の直轄領である志紀県の県主が奉斎していたことに由来しますが、『延喜式』（康保4〔967〕年施行）の中にある「神名帳」に記載された、由緒正しい神社です。延喜式に記載されていることから、式内社と呼ばれますが、大中小の格付けの中でも志紀県主神社は大社に位置づけられている格式の高い神社です。ちなみに、旧河内国内で式内社は

113社、大社は23社あります。

なお、志紀というのは国府遺跡周辺の地名で、古代には河内国志紀郡とよばれていました。また、県主とは本来的に称号あるいは職名ですが、このような制度が廃止された奈良時代以降になると、姓に変化しますので、志紀県主とは氏と姓を表すものと考えられます。県とは現在でも兵庫県や奈良県のように地方の行政単位として存在していますが、古い時代の行政単位で、律令体制では国や郡に変わっていきます。すなわち、県主とはこの県の首長、つまり現在の県知事や市長に相当します。



写真4：志紀県主神社

ところで、県、県主は西日本中心に約60が確認できますが、志紀の県主は『古事記』に、「雄略天皇が生駒の暗峠で河内を国見したとき、堅魚木^{かつお}を上げた立派な家を見つけ、志紀大県主の家だと知り大王家に似せた家を造るのはけしからぬ、焼き払えと命じた」という内容の記事があるように、大変な権勢を誇っていたことが判ります。

この記事の後段は志紀大県主が平身低頭、白い犬に布を背負わせて奉獻し事なきを得たという記述に続きますが、これは一種の服属伝承と考えられます。さらに、雄略天皇が犬と布を奥の若日下部王に与えたという点に注目された中西康裕さんによると、県主は天皇の内廷の部分に関わっていた職掌と考えることもできます(註3)。その他、河内国造、志紀屯倉なども重要ですが、時間の関係で省略します。

また、大和川と石川の合流地点には、河内国分寺・国分尼寺跡、田辺廃寺、原山廃寺、玉手廃寺、青谷廃寺など、古代寺院が集中しています。国府遺跡内には、衣縫廃寺の塔心礎といわれる礎石が

あります。その他に衣縫廃寺出土の礎石といわれる礎石が、国府八幡神社境内の灯籠台石として2個、蓮休寺境内に1個が保存されています。

この衣縫廃寺は、『日本書紀』『続日本紀』に散見できる倭漢氏系の衣縫氏・衣縫王と関連すると推定されています。塔心礎がある場所の小字がイヌイであることも参考になると思います。

なお、「河内国府は志紀郡にあり」と『和名抄』にあります。その位置には諸説があり、国府遺跡(註4)や、はざみ山遺跡(註5)、船橋遺跡(註6)説など、定説をみしていない状況にあります。



写真5：衣縫廃寺の塔心礎

また、先ほどの地図(図2)の下端近くに道明寺天満宮さんがあります。道明寺天満宮は、旧国郡でみると河内国志紀郡土師郷に所在し、国府遺跡と同じ台地上に立地しています。天満宮の縁起によりますと、古く垂仁天皇の時代に遡る土師社が前身とされています。時代が下って、菅原道真公の叔母・覚寿尼が土師(菅原)氏の出身地にある道明寺に居を構えており、道真公もよく訪ねていたことが『国花万葉記』などの文献から伺えますが、天曆元年(947)に道明寺と改称し、天神(道真公)を祀ったのが天満宮の起こりとされています。

明治5(1872)年には、神仏分離令により道明寺と天満宮とに分離し、昭和27年(1952)に道明寺天満宮と改称して今日に至っている由緒正しき伝統のあるお社です。なお、宝物館には菅公遺品と伝える国宝6点、重要文化財2点を含む、数千点に及ぶ各種の史資料を所蔵されています。

このように、文献史料などの検討からも、河内国府遺跡の周辺は古代から重要な歴史の舞台であったことがわかります。

V 国府遺跡発掘調査区図

この図（図3）は、国府遺跡の中心部で発掘調査された地点の位置関係図、次の図（図4）は、本日の話題の中心である、玦状耳飾と関連の深い埋葬人骨が出土した地点だけを表示したものです。現時点の発掘調査成果からは、縄文人骨が小字「骨地」を中心とした、特定地点に集中して出土していることが理解できると思います。

VI 大正時代の発掘調査風景①（写真6）

発掘調査の翌年、大正7（1918）年の7月に刊行された報告書に掲載された、京都帝大による第一回調査の風景です。この写真図版自体が、当時の遺跡景観や発掘調査の具体的な様相を確認することができる重要な記録であり、文化財です。

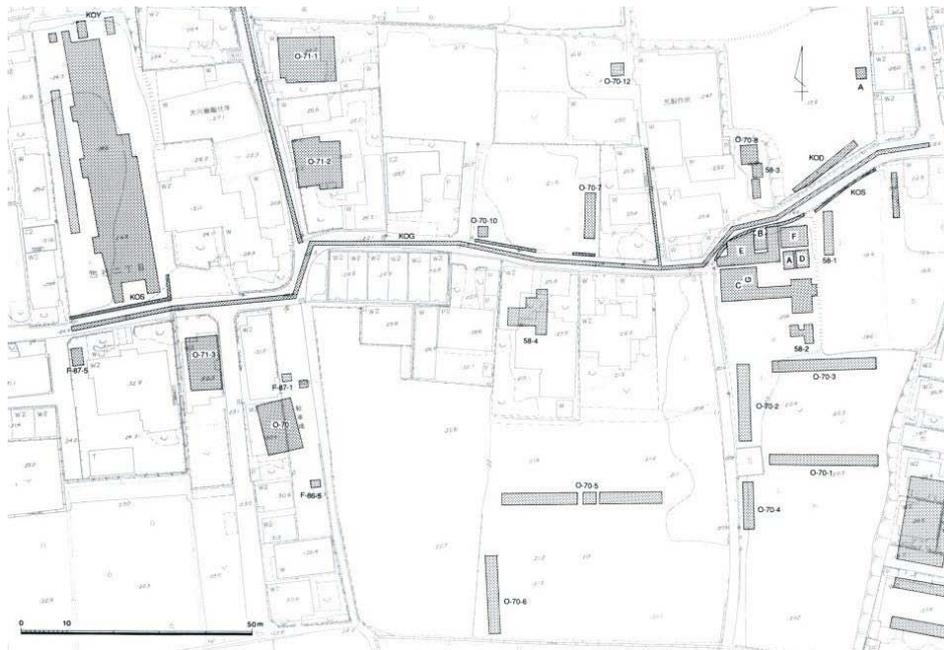


図3：国府遺跡中心部の発掘調査位置 藤井寺市教育委員会 1996)

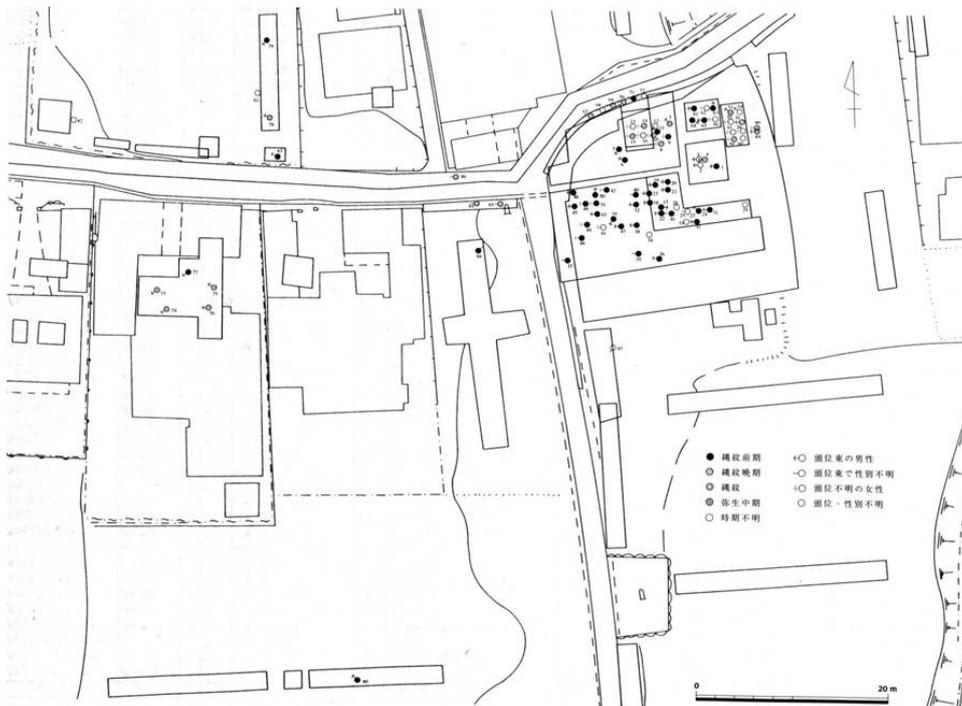


図4：国府遺跡出土の人骨分布（天野 2001）

VII 大正時代の発掘調査風景② (写真7)

同じく、大正7(1918)年8月に実施された京都帝大の第二回調査の発掘調査報告書に掲載された調査風景です。国府遺跡の埋葬人骨は比較的浅いところにあり損傷を受けていることや、時期の異なる人骨が重複していることもあり、その所属時期を正確に判定することは難しい状況にあります。確実に共伴した土器や遺物をみた場合、縄文時代前期と弥生時代前期のものがあり、古墳時代前期の埋葬人骨が含まれている可能性があります。しかし、現在までに発掘された埋葬人骨は、

数量的に縄文時代前期のものが中心であることは揺るぎません。

なお、濱田耕作(青陵)先生は英国留学で見聞してきた、当時としては最新の発掘方法で国府遺跡を調査されており、報告書には、①縄文土器の系統、②埋葬人骨の人種問題、③身体装飾品などについて言及されています。また、調査報告書を直ちに刊行されていますが、今日に至るまで求められている考古学調査の基本姿勢の一つを再確認させられます。



写真6：京都帝国大学第1回調査風景(濱田1918)

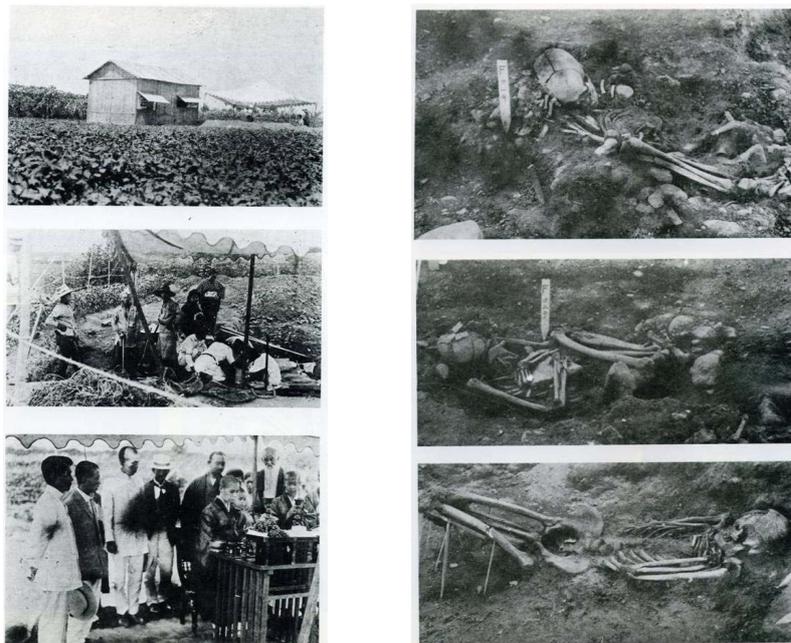


写真7：京都帝国大学第2回調査風景(濱田・辰馬1920)

Ⅷ 大正時代の発掘調査風景③ (写真 8・9)

これらの発掘調査の進行状況と結果については、調査期間中に、逐次、大阪毎日新聞で詳細に報告されました。写真 8 の新聞記事は大正 6 (1917) 年 10 月 15 日付の「河内国府遺跡調査(1) 今回の学術的発掘」として、岩井雍南記者が署名記事にしています。今日のわが国では、いずれかの新聞で発掘調査の記事が掲載されない日はないとってもよく、時に全国紙の一面に考古学の記事が載る世界的にもまれな環境にあります。本山彦一氏が大阪毎日新聞の社主であることを考えても、当時としては異例なことでした。

連載された記事の内容は、国府遺跡を発掘する契機について述べたもので、当初はハンドアックス状の大型打製石器が旧石器か否かの確認にあったことがわかります。やがて、埋葬人骨が出土すると、発掘の関心は急速に人骨に移っていく様子が如実に描かれています。なお、後で詳細を述べますが、発掘調査は道明寺天満宮の南坊城良興氏の支援を受けて行われていることが、記事の中に明記されています。

その後、先ほど申しましたように、これらの発掘調査の報告は、『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第二冊、第四冊として刊行されています。

なお、現在の精緻な発掘調査報告書をご存じの方から見ると、一見非常に簡略的なものと感じられると思いますが、約 90 年前の当時、考古学研究に関係する教員が在籍していたのは東京帝国大学と京都帝国大学など、ごく限られた大学機関のみであることを考え合わせると、創生期の発掘調査報告書としては問題意識が明確な、非常に完成度の高いものであり、これ自体が文化遺産とでき

るものです。

もうひとつの記事は大正 6 年 10 月 31 日付の「河内国府遺跡調査 (13) 獣魚骨歯と結語」で、同じく岩井雍南記者の署名記事です。



写真 9：大阪毎日新聞 大正 6 年 10 月 31 日付
「河内国府遺跡調査 (13) 獣魚骨歯と結語」

Ⅸ 道明寺天満宮の発掘調査支援

この写真 (写真 10) は、大正時代の国府遺跡発掘調査時に執り行われた慰霊祭の様子を撮影したもので、道明寺天満宮に保管されてきました。また、道明寺天満宮宝物館には、国府遺跡の出土遺物が所蔵されています。特に、2 点の玦状耳飾は出土した遺跡や埋葬人骨との関係が明確という点で重要です。この 2 点がここにあるのは、たまたま遺跡に近いから所蔵されているというような話ではなく、しかるべき正当な理由があります。

先ほど、国府遺跡の発掘調査は大正 6 年 (1917) に開始されたと申しましたが、6 年間に及んだ大正時代の発掘調査の大部分について、ここ道明寺天満宮の宮司さんが支援されていた事実が、近年見いだされた『国府遺跡発掘一覧表』 (写真 11) という文書により、さらに明確になりました。



写真 8：大阪毎日新聞 大正 6 年 10 月 15 日付
「河内国府遺跡調査 (1) 今回の学術的発掘」



写真 10：法要の様子 (南坊城 2005)

この文書は、筆跡から現宮司でおられる南坊城充興さんの祖父である、第3代宮司の良興さんが認められたと推定されるもので、発掘地点や出土品などについて詳細に記載されています。従来から、濱田耕作先生や本山彦一氏らの発掘調査隊は国府遺跡から約10分の南坊城良興さんの私邸に滞在して調査を実施されたことが、伝聞や当時の新聞記事をはじめとした断片的な記録などから推定されていましたが、今回、道明寺天満宮の方でもそれを証明する文書が保管されていたことで、南坊城良興さんが発掘調査に深く関与され支援されていたことが判明しました。



写真11：国府遺跡発掘一覧表（南坊城 2005）

なお、道明寺に保管される玦状耳飾は、昭和12（1937）年に刊行された『松陰本山彦一翁』という本山氏の伝記に、「道明寺土師神社宝物館に耳輪1個を寄贈」とあり、南坊城良興さんの物心両面に及ぶ献身的な協力に対して、道明寺天満宮が所蔵される結果となりました。なお、耳輪1個とあるのは、同じく埋葬人骨と共に京都帝国大学に寄贈された玦状耳飾2対4個の表記方法が2個とあることから、1対で1個と表記したものと判断できます。

この間の顛末については、わが関西大学文学部史学・地理学科を1997（平成9）年3月に卒業された禰宜・南坊城光興さんが、今年の3月に刊行された『阡陵』第50号に、「国府遺跡と道明寺天満宮」と題して紹介されています。

現在では、様々な問題を含みつつも調査体制が整備され、考古学的な発掘も大部分がある種、手

続きとして行政的に機械的に行われていますが、第二次世界大戦以前は世の中の役に立たないものの双璧として、考古学と天文学があると、例えられていました。このような逆境ともいえる歴史を経て、社会的にも認知された今日の考古学があるのは、各地において南坊城良興さんのような理解者の支援がなければあり得ず、日本考古学が発展した陰の功労者の一人とすることができます。

2. 玦状耳飾の形態や変遷、製作技法など

I 関西大学博物館の所蔵する国府遺跡出土品

関西大学博物館では、重要文化財を16点所蔵していますが、実にその中の15点までが国府遺跡関係の資料です。

これらの2点（写真12）は、国府遺跡から出土した重要文化財の一部です。左の鉢形土器は胴部上半部に5条の爪形文、下半部に羽状縄文を施す縄文時代前期のもので、第4次調査の大串氏第3人骨の胸上から出土しましたが、その右耳には玦状耳飾が装着されていました。右側のヘラ描沈線の綾杉文や2個1対の円形浮文が施された高杯形土器は、古墳時代前期に位置づけられます。



写真12：右・高杯形土器、左・鉢形土器
（共に重要文化財）（関西大学博物館 1998）

II 玦状耳飾

玦状耳飾の名称は、古代中国の「玦」に形態が類似することに由来しますが、中国で「玦」とは腰に吊しておく一揃いの器物の一つであり、弓を引く時に親指にはめる、突起のついた指輪状の道具を指します。中国では戦国時代から漢代に裝飾品化した玉器も、玦と呼ばれました。

玦状耳飾は縄文時代前期を中心に流行しましたが、縄文時代前期の年代については、一般的に紀元前3500年から4500年前後（今から5500～6500年前）とされています。これらの年代観は

放射性炭素C 14の性質を利用した年代測定方法に基づいています。ただし、近年ではC 14の年代を校正する必要性が唱えられており、将来的には年代観の修正が必要となるかもしれません。

なお、縄文時代前期は気候の変動が激しかった最後の氷河時代が終わり、温暖な沖積世がはじまった時期で、現在とあまり変わらない環境になった時期でもあります。温暖化にともない平均気温は現在よりも2度前後高めで、海岸線が内陸に入り（縄文海進、平均5m上昇）、人口も10万人を超えたであろうと推定されています。

さて、一覧表（図5）は国府遺跡から発掘調査で出土した6対12個の特徴を、西口陽一さんが纏められたものです。この中で、関西大学博物館では、3対6個を保管しています（写真13）。大きさは右上のもので、直径5.1cmあります。なお、一覧表から、性別が判明している埋葬人骨は、女性ばかりであることに気づかれると思います。国府遺跡では現在まで80体以上の埋葬人骨が発掘されていますが、玦状耳飾は一部の女性に限って

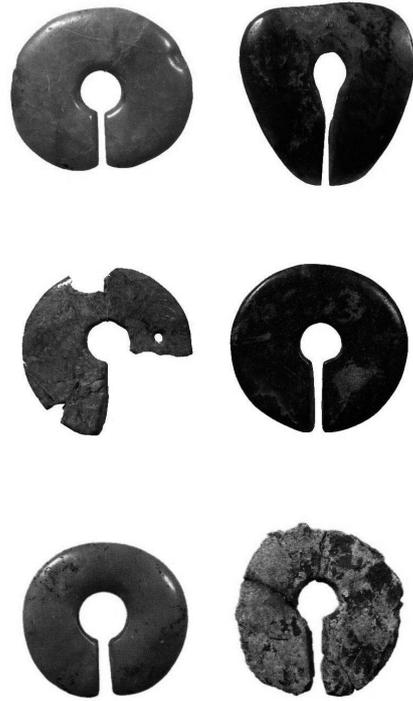


写真13：関西大学博物館所蔵玦状耳飾
（関西大学博物館 1998）

	左耳下	右耳下	備考
第3次調査 (大正6年10月)	4号(♀)		・2個とも濃緑色の滑石製。 (関大蔵)
	13号(♀)		・左は輝石(?)製、右は粗玉製。 ・白玉伴出。 (関大蔵)
	14号(♀)		・2個とも玉製。 ・上腕骨に鼠の歯痕。 (京大蔵)
第4次調査 (大正7年4月)	2号(?)		・2個とも凍石製。 ・胸上に4寸大の片麻岩1個を置く。 (京大蔵)
	3号(?)		・左は蛇紋岩(?)製、右は軟玉製。 ・完形深鉢形土器を伴出。 (関大蔵)
	4号(?)		・2個とも凍石製。 ・人骨片に伴出のため左右の特定は不可能。 (道明寺天満宮蔵)

図5：国府遺跡の玦状耳飾一覧

(梅原 1922 ほかより集成、一部改変) (西口 1983)

装着されており、埋葬の時期差もあると推定されます。神奈川県の上田浜遺跡(縄文時代早期中葉)では、3基の土壇から玦状耳飾が1対ずつ6個出土しており、藤田富士夫さんが推定するように(註7)、3世代に渡って埋葬された可能性があることを参考にすると、国府遺跡でも特別な女性が3世代以上に渡って埋葬されたのかもしれない。

また、1対となる玦状耳飾の色調や形態が異なることに気づかれると思います。これらを検討した藤田富士夫さんらは、左耳の方が型的に古く、左耳優先である可能性があることを指摘されています(註8)。これは、一個だけ付けた埋葬人骨が左耳に付けていることが大部分であることから補強されます。この理由として、①通過儀礼や婚姻前と以後とで順次に付け加えたとする説や、②他集団へ婚姻などで移動したときに、その集団のものを新たに付け加えたとする説、③伝世品を左耳に付けて、右耳には一対の片方の1個を付け、もう片方の1個は子孫に譲ったなどの説などが提唱されています。

次に、先に取りあげた『松陰本山彦一翁』に記載されている、京都大学に埋葬人骨と共に寄贈された玦状耳飾です。先ほどの関大所蔵分共々、孔

が開けられたものが多いことに気づかれると思います。これは薄いために折れたものに孔を開けて結束・補修し、大事に使用した痕跡です。しかし、他の遺跡で出土した玦状耳飾の中には、破損していないにもかかわらず、上端に2～3個の孔を開けた例があり、中国における本来的な使用法との関連性をうかがわせると共に、その起源を考える上で参考となります。

次の2点(写真14)は、本山彦一氏から道明寺天満宮に感謝の印として寄贈されたものです。

さらに2点の表面採集された玦状耳飾が知られています。これらを含めて、国府遺跡からは総数15～16個体の玦状耳飾が出土したと伝えら



写真14：道明寺天満宮所蔵玦状耳飾
(藤井寺市教育委員会 1998)

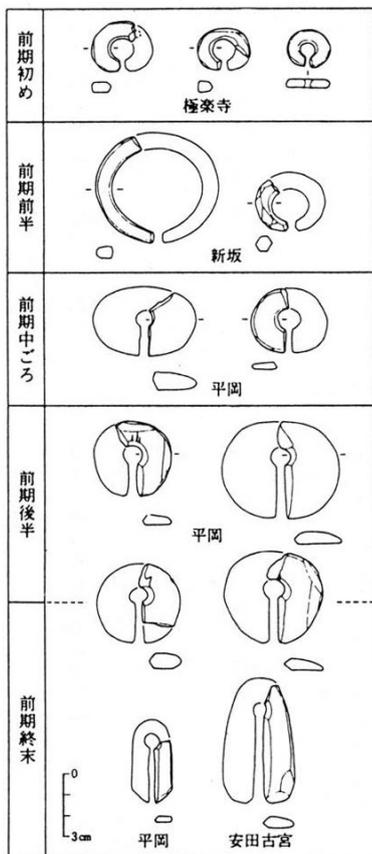


図6：玦状耳飾の編年(藤田 1992)

れています。

Ⅲ 玦状耳飾の編年

発掘資料が比較的整っている富山県の玦状耳飾を編年された藤田富士夫さんの研究によると、一般的な傾向として、図6にあるように、形態が変化しました。前期前葉には、長軸を横位置に持つ長円系で断面は円形を示し、滑石や蠟石で作られました。前期中葉には円形で断面も薄く定型化したものになり、蛇紋岩製のものが出現します。前期後葉には長軸を縦位置にもつ長円系が主流になります。

この編年に国府遺跡の出土品を照らし合わせると、前期中葉から後葉にかけて位置づけられることがわかります。なお、現在のところ、玦状耳飾は縄文時代早期中葉に出現し、前期を中心にして、一部は後期まで耳飾りとして使用されたようです。

Ⅳ 玦状耳飾の製作技法(図7・8)

玦状耳飾は、縄文時代の身体装飾品の中でも特異な存在であり、加工技術にしても、滑石や蛇紋岩などに孔を開けて切り込み、縁取りや研磨する工程は極めて高度なもので、加工技術やその展開についてもあまり明確に判らないのが現状ですが、切り込み加工の技術的特徴には中国・江南地

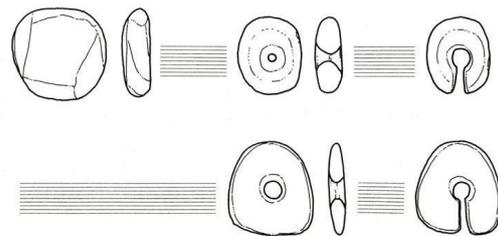


図7：玉飾製品製作工程模式図(山口 1990)

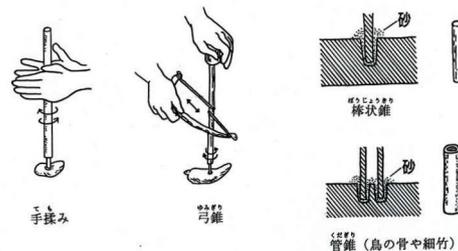


図8：穿孔の方法と用具(富山県埋蔵文化財センター 1997)

方と共通する特徴があり、その源流を暗示させる一つの根拠となります。

玦状耳飾の材質についてみると、鹿角製や土製品がありますが、軟質の石材を加工するものが中心です。石製品の製作地については、北陸から北信地方に縄文時代前期の製作地があり、その出現期から供給や受容のネットワークがあったことがうかがえます。なお、鹿角製品や木製品など、腐食しやすい有機質を材料とする玦状耳飾がもっとたくさん使われていた可能性があります。

また、土製品は関東地方で100個体以上集中的に出土するなど、各地で出土例が見られますが、藤田富士夫さんが指摘されるように、石製品の生産地である日本海側沿岸でも出土例が増加していることから、石製品の入手が困難な地域で代用品として用いられたというような、単純なものではないようです(註9)。なお、土製玦状耳飾には、補修痕のあるものや黒や赤に彩色されたものがあり、石製品と同様、大切に使われたことが判ります。

IV 玦状耳飾の装着法

この写真(写真15)は、関西大学博物館が所蔵する国府遺跡第3次調査で確認された第4号人骨の頭部石膏型です。玦状耳飾の使用方法を具体的に示す貴重な資料です。



写真15：国府遺跡第3次調査第4号人骨頭部石膏型
(関西大学博物館 1998)

玦状耳飾の使用法にほぼ決着がついたのは、大正6(1917)年10月の大串菊太郎・本山彦一両氏による国府遺跡の発掘調査の結果です。それ以前、玦状耳飾は環石や石環などと呼ばれ、日本考古学の黎明期、すでに大野延太郎氏が古墳時代

の耳飾と形態が類似することから、耳飾りであろうことが類推されていましたが、はれて実証されることになりました。また、大串氏第13号人骨の頭部を覆っていた縄文時代前期の土器など、発掘調査の成果を受けて、梅原末治氏が玦状耳飾は、縄文時代の遺物で古墳時代の金属製品とは脈絡がないことを明らかにされています(註10)。この耳飾説は、大正9年に調査された岡山県の津雲貝塚で左耳に鹿角製の玦状耳飾を装着した、縄文時代後期の女性人骨が発掘されて、確定的になりました。

なお、出土状態を基にした装着模式図(図9)から明らかなように、玦状耳飾はクリップのように耳朶に挟んで付けるのではなく、耳朶に開けた切り込みを通して引っかけるように装着します。すなわち、耳朶には玦状耳飾の幅と同程度、切り開かれている必要があります。



図9：玦状耳飾装着模式図

3. 玦状耳飾の分布や源流など

I 玦状耳飾の分布(図10・11)

玦状耳飾は縄文時代の早期末までには出現し、前期末か中期初め頃までには北海道から九州まで普及します。石製の玦状耳飾は500個体以上出土しています。

東アジア的な視野からみた場合、濱田耕作先生や山内清男氏以来、形態的に玦状耳飾と関係が深いと考えられている最古の「玦」は、中国の河姆渡遺跡(かむど)で発掘されています。この浙江省余姚にあ

河姆渡遺跡は、1977・78年の二年度調査された新石器時代の遺跡ですが、早期河姆渡文化期とよばれる時代の土層から4点出土しています。殷・周時代の中国では、「玦」は「佩玉」として用いられているため、日本の玦状耳飾と比較することを疑問視する見解もありましたが、中国・江南地域の新石器時代の発掘調査が進むにつれて、耳飾りとしての使用法が確認されるようになりました。

例えば、江蘇州常州市にあるウトン遺跡は、紀元前4000年頃の青蓮崗文化の江南類型の文化様相と推定されていますが、M53と番号が付けられた成人女性の埋葬人骨の耳部から、「玦」の出土が確認されています。あわせて、ウトン遺跡で出土した穿孔石斧が、縄文時代中期の硬玉製大珠の原形となったのではという推論もあります。

従来の形態的な類似性の比較にくわえて、使用法の比較の観点を加味された西口陽一さんの研究では、河姆渡遺跡やウトン遺跡がある長江下流域を中心とする江南地域では6000年前から4000年前まで、「玦」の使用が続いており、やがて「佩玉」として長江中流域や東北部などに伝播していきます(註11)。この江南地方で「玦」が盛んに用いられた時期と重なる時期、すなわち縄文時代早期末から前期の時代に、日本列島で玦状耳飾が流行します。さらに、江南地方で「玦」の使用が衰退することと歩調を合わせて、日本列島でも玦状耳飾が衰退します。これらの状況から、玦状耳飾の起源は中国・江南地方と深い関係がうかがわれます。

ただし、縄文時代早期中葉まで遡る玦状耳飾の事例があることや、近年ではC14の年代を較正する必要性が唱えられていることから、日本独自に発展した装飾品の可能性もあります。例えば、北海道共栄B遺跡から出土した縄文時代早期後半の環状石製品は切れ目を入れると玦状耳飾になる形態であり、玦状耳飾の祖形の候補の一つと考えられています(註12)。

また、中国では「玦」にともなっている「璜(ネックレス)」がないことも、日本自生説に有利に働くかもしれません。先の藤田さんは、日本で半環状石製腕飾りとされる石製品が、「璜」ではないかと推定されています。また、泉拓良さんは、

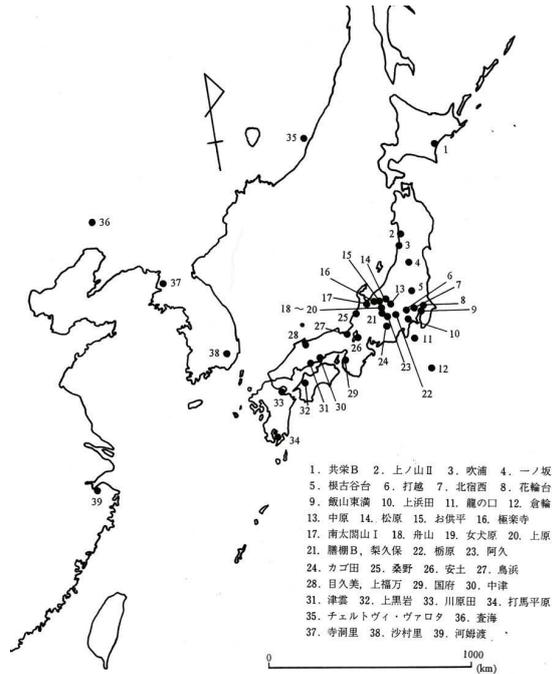


図10：玦状耳飾・管玉分布図(川崎1998)

地域	¹⁴ C年代				
	B.P. 6000	5000	4000	3000	2000
江南地区(A) (河姆渡～良渚)	←		---		
日本(B) (縄文前期)		←	→		
長江中流(C) (大溪)			---		
中原地区(D) (龍山～裴)			---	→	
南海地区(E) (新石器～環陶)			←	→	
西南地区(F) (嶺南～西漢)				←	→
東北地区(G) (双家店下層)				←	→



図11：東アジアにおける玦・玦状耳飾分布図と編年(西口陽一氏資料をもとに作成)(藤田1985)

山内清男氏が調査された安土遺跡の資料に、「玦」と「璜」が揃っていることを根拠にして、「璜」は急速に廃れたとして、玦状耳飾の中国起源説を唱えられています(註13)。

このように、論は尽きませんが、分布図から明らかかなように、玦状耳飾に類した遺物は中国中原

から台湾、インドシナ半島など広範囲に分布しています。日本の玦状耳飾がどのような契機で出現し、これらとどのような関係性があり、意義をもつのか、興味深い問題です。

形態的には、河南省にある殷（紀元前 1600 年～1028 年頃）の大墓から日本の玦状耳飾とほぼ同型同大の遺物の出土が知られており、洛陽中州路の戦国時代（紀元前 403 年～221 年）の古墓群からは埋葬人骨の耳部分からの出土が知られ、国府遺跡と同じように耳飾りであることが明らかです。

II 縄文時代の装身具

図 12 は、旧石器時代から飛鳥・奈良時代までの要素を視覚的に纏めた一覧表です。

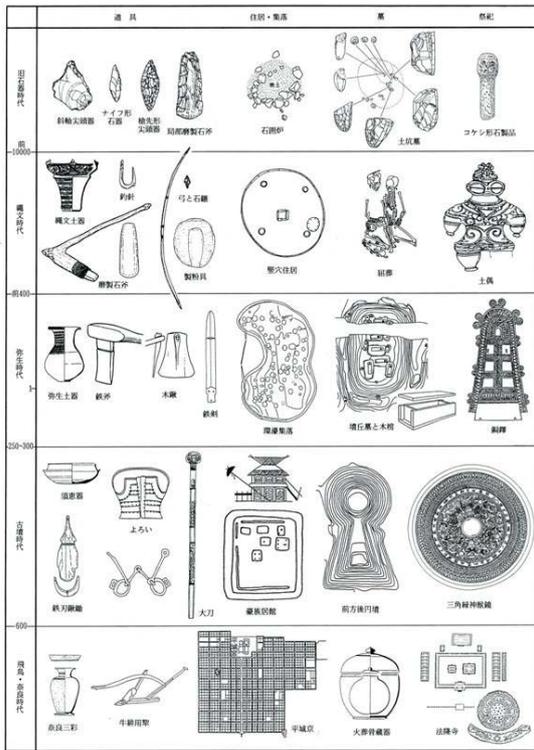


図 12：ものの移り変わり（日本第四紀学会編 1992）

玦状耳飾は縄文時代中期以降、耳栓・滑車形耳飾へと、その立場を譲っていき、後期には消滅していきます。

このような変化の中で装飾品をみた場合、現代では茶髪や長髪・髭・アクセサリーなど、個性を自由に表現することができますが、先史・原史・

古代では個人的な動機ではなく、所属する社会・集団の規制に従うものであり、支配者は特定のアクセサリーや髪形などで社会的身分や威厳などを表現しました。

III 弥生時代の装身具

弥生時代になると装身具は多様化しますが、玦状耳飾の役割との関係でみた場合、貝輪に注目できます。この腕輪である貝輪は、南西諸島産のゴホウラ・イモガイの殻を輪切り・研磨して製作されたもので、呪術者や首長一族のみが装着をゆるされた貴重品であり、貝自体や巴形の円孔、渦巻き紋様もつ、呪力に着目したと想定する説が有力です。

例えば、福岡・佐賀県の埋葬人骨の例でみた場合、男（ゴホウラ）・女（イモガイ）とも右手に装着することが多く、利き手の右腕を使用しなくてもよい男性がいることや、ゴホウラ製腕輪を副葬された幼児がいることから、幼児期から特別に選別された可能性が想定されています。また、女性では、左右に装着する例も多く、両手とも不使用の人物が存在した可能性さえ推定されています。

IV 古墳時代の装身具

写真 16・17 は、古墳時代の金環や勾玉、管玉などです。弥生時代から古墳時代になると、暗緑色の碧玉や淡い緑色をした緑色凝灰岩で貝輪を模倣した腕輪の製作が開始されます。弥生時代、貝輪はすでに儀礼や祭りの時だけに装着・使用し、見せびらかしに重点がうつり象徴化、すなわち持っていることだけでよい、人あるいは悪霊に見せるだけでよい、「見せる腕輪」に転化していますが、さらに古墳時代ではそれを与えられ所有し



写真 16：金環・金銅環 富木車塚後円部第 I 主体（大阪府立近つ飛鳥博物館 2003）



写真 17:首飾り(管玉・平玉・勾玉・算盤玉)
豊中大塚古墳第1主体(重要文化財)
(大阪府立近つ飛鳥博物館 2003)

ていることによって、ヤマト政権という後ろ盾があることを示す権威の象徴(威信財)に変化しています。また、配布する側にとっては、自らを中心とする勢力結集の目的で、製作を掌握したと考えられています。

古墳時代後期、6世紀には日本列島は我も我もと金製品の入手に躍起となり、黄金ブームが到来し、舶来旋風が吹きます。例えば、各地の首長は金属製の冠をかぶった、日本史上で稀有な時期を迎えます。同時に、新沢千塚、吉見百穴というように、小円墳や横穴墓が数多く(10万基以上現存)築造されます。有力な農民階層のほとんどが金銅製の耳飾りを副葬し、膨大な数量になる金製品と玉類の生産・流通体制が整備され、畿内の大王権が確立したことがうかがわれます。

V 古代の装身具(写真 18)

ところが、7世紀以降の大陸(隋・唐)文化の模倣に伴い、いわゆる唐風が流行すると、直接的に身を飾ったネックレス・イヤリング・腕輪・指輪などはすべて衣服に吸収されてしまいます。色に溺れた人々は、アクセサリーを忘れ去ります。現在でも日本語に色彩に関する単語が多い理由は、ここに出発点があります。中国でも唐三彩の人物像や墳墓の壁画人物像などを見ると、舞姫などを例外として、ほとんど装身具を身に付けていない表現をとっています。

従来の装身具である金環や切り子玉などは、寺院の塔・舍利荘厳具などに使われるようになりました。その結果、例えば腰帯では、役人の種類や位によって、帯の長さ・幅、綴じ付ける部品、垂



写真 18:男子像・女子像 7世紀前半
(大阪府立近つ飛鳥博物館 1994)

れ下げる部品の種類・材質など、細かに形式を規定しました。腰帯を見れば名を知らずともその役人の地位がわかるようになりました。ここに国家が装いを完全に統制する時代が到来し、身体装身具は急速に姿を消しました。

4. 国府遺跡発掘の意義

いささか話が冗長に流れてしまいましたが、最後に多岐に及ぶ国府遺跡の意義を2点に要約したいと思います。

第一に、本日の発表では取りあげませんでした、考古学の学史としてみた場合、国府遺跡は学術発掘により、近畿地方ではじめて後期旧石器時代(33000年前～12000年前)の石器(約20000年前)が確認された遺跡としても重要です(写真19)。大正時代の発掘調査も、旧石器時代の石器の確認を目的に開始されましたが、先に述べましたように、すぐに縄文時代の埋葬人骨に関心が移りました。

それから40年、時に1957(昭和37)年のことで、発掘調査を担当された研究者の一人、鎌木義昌さんは、更新世の土層中から発見されたサヌカイト製のナイフ形石器(国府型ナイフ形石器)の一連の製作技法の過程を復元して(図13)、「瀬戸内技法」と命名されました。この世界に全く類例のない、サヌカイトの石材特性を生かした特徴的な瀬戸内技法で製作された石器は、全国的に観



写真 19：国府第 3 地点出土石器（国府型ナイフ形石器）
（大阪府教育委員会 1990）

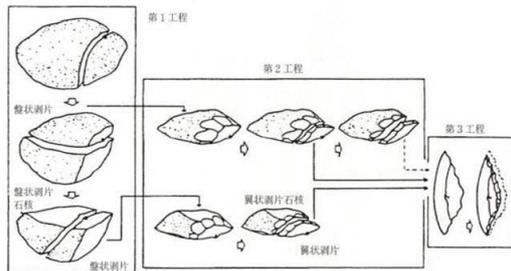


図 13：瀬戸内技法の工程概念図（松藤 1986）

察されており、その技術が拡散したことが判明します。このように、国府遺跡の名称に因んで命名された「国府文化」は、日本列島の後期旧石器時代のなかでも、周辺大陸では遺物が発見されていない、列島固有で独創的な石器文化として、光彩を放っています（註 14）。

第二に、国府遺跡の埋葬人骨の頭骨には、門歯や犬歯などを抜き取る抜歯や、フォーク状に削る（叉状）研歯などが観察できることに注目できます。抜歯は後期旧石器時代の沖縄港川人骨（約 18000 年前）に抜歯の痕跡があり、縄文時代晩期には成人のほぼ 100%が行っていましたが、弥生時代まで行われ、それ以降も特定の集団では継続した風習です。

一方、研歯（図 14）は縄文時代後・晩期に行われた風習で、この研歯を研究された春成秀爾さんによると、東海西部から近畿地方にかけて 29 例確認されていますが、性別の判る男女は同数（14 体ずつ）です。10 歳代の研歯例があり、抜歯と組み合わせて行われたり、研歯のあるものを合葬したり近接して埋葬している例があることから、特別の家系の者に若年で施した者と推定されています（註 15）。

従来の漠然とした、牧歌的で等質性の高い社会であるという縄文時代観から、近年の石川県真脇遺跡や青森県三内丸山遺跡などの発掘調査の成果をうけて、新たな飛躍的ともいえる縄文文化論が唱えられつつあります。ここではその評価についてはおきますが、少なくとも縄文時代が高度に完成された豊かな狩猟採集民社会であったということ为前提にした場合、国府遺跡の玦状耳飾は一部の女性だけが付けていることに加えて、その形態や材質に優劣があること、副葬品の有無とも一致している可能性があることなど、すでに縄文時代前期の社会に、定住や貯蔵が行われることをきっかけに、役割上の差や階層差などが生じていた可能性が示唆されます。

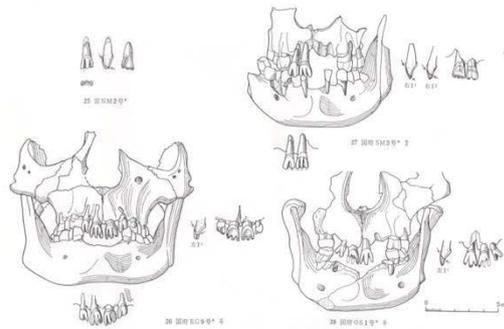


図 14：雷・国府遺跡出土人骨の叉状研歯（春成 1989）

これらをはじめ、国府遺跡の発掘調査は縄文文化、とりわけ近畿地方の縄文時代の研究に大きな影響を与えました。

以上のように、国府遺跡は、きわめて重要な遺跡でありながら、例えば、ご当地である藤井寺の名称の由来とも関係の深い、百濟系とされる渡来系氏族の白猪氏、720 年（養老 4 年）改姓して葛井氏の出身との説が有力な遣唐留学生「井真成」の墓誌（735 年正月没）の存在が昨秋中国・西安で発表されるなど、大きな発掘調査の成果が陸続と出される近年は、ややもすると忘れられたような存在にあるようにも見えます。

しかし、学史的にも重要な国府遺跡の歴史的資料を保管する機関に關係する者の一人として、遙か 2 万年前から国府遺跡の地に足跡を連綿と遺した先人に思いを馳せながら、本日の発表の結語とさせていただきます。

長らくのご静聴、誠にありがとうございました。

- 註 1：濱田耕作 1918「河内国府石器時代遺跡發掘報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第二冊
濱田耕作・辰馬悦蔵 1920「河内国府石器時代遺跡第二回發掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第四冊
- 註 2：島五郎・山内清男・鎌木義昌 1957「河内国府遺跡略報」『日本考古学協会第二〇回総会』
大阪府教育委員会 1970『藤井寺市国府遺跡調査概要』
藤井寺教育委員会 1998『国府遺跡』藤井寺市文化財報告第 18 など
- 註 3：中西康裕 1997「史料にみる国府遺跡—志紀県主と志紀屯倉—」『国府遺跡の謎を解く』
- 註 4：藤岡謙二郎 1969『国府』日本歴史叢書 25
- 註 5：野上丈助 1977「河内国府と国分寺跡について」『古代を考える』10号
- 註 6：藤井利章 1984「河内国府と衣縫廢寺」『龍谷史壇』第 85 卷
- 註 7：藤田富士夫 1989『玉』
- 註 8：註 7 に同じ
- 註 9：註 7 に同じ
- 註 10：梅原末治 1971『日本古玉器雑攷』
- 註 11：西口陽一 1983「耳飾からみた性別」『季刊考古学』第 5 号
- 註 12：註 7 に同じ
- 註 13：泉拓良 1997「玦状耳飾の謎」『国府遺跡の謎を解く』
- 註 14：松藤和人・1997「国府型ナイフ形石器とは何か」『国府遺跡の謎を解く』
- 註 15：春成秀爾 1989「叉状研歯」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 21 集

米田文孝（関西大学文学部教授）

関西大学大学院時代から網干善教氏の下でインド仏教遺跡の発掘に従事。その後、網干善教氏の跡を受け、考古学担当者として関西大学に勤務。なにわ・大阪文化遺産学研究センター・生活文化遺産研究プロジェクト・プロジェクトリーダー。